徒然なるままに…27

－中学校区公開研を振り返って－

平成２７年2月１２日
白島小学校　研修部

遅くなりました。

早いもので，２月も中旬を迎えようとしています。年度末に向けて，相変わらずお忙しい日々を送られていることでしょう。

さて，１月３０日に，本校を会場として，「幟町中学校区保・幼・小・中連携教育研究会　公開研究会」を行いました。中学校区の公開研だったにもかかわらず，盛大な雰囲気の中，無事終えることができました。遠くは，京都からと，多くの先生方に参会していただき，たくさんの示唆をいただくことができました。研修部がなかなか手際よく計画しきれなかったにもかかわらず，先生方が心一つに取り組んでくださったおかげです。ここで改めて，感謝申しあげます。

今回は，この会を通して感じたことから，今年度の成果を振り返ってみようと思います。

一つ目は，本校の授業づくりと子どもの育ちを発信できたことです。問いと考え方の設定によって思考を仕組み，子ども相互の意見交流によって練り上げる「学び合い」のある授業づくりと本校独自の，言い換えれば，先生方の持ち味で開発された教材と「白島ぷらん」をそれぞれの学年で遺憾なく展開することができました。そこに，参会された多くの先生は，共感してくださったと思います。

最近，「子どもの発言が多くなった。」とか，「『意見をつなぐ』という意味が少し分かってきた。」など，授業での子どもの変容を聞くことが増えました。これは，子どもが主体的に探究する授業展開と意見交流の仕方の定着が図られてきた表れだと思います。

その上で，「待つこと」を考えてみてください。発問した後，子どもが発言した後，先生の筋書き通りに展開しなかったとき，つい，発問を替えたり，補助発問をしたり，意見を言ったりしていませんか。「○○劇場」ではありませんが，先生方の発言が中心となっている授業が多いように思います。問いを投げたら，先生方は，とにかく待って，子どもの思考と議論に任せるようにしてはどうでしょうか。

二つ目は，先生方お一人お一人が研究の主体者となって取り組んでくださったことです。今回の準備に取り組んでくださる先生方の仕事っぷりやお姿から，それぞれの役割を懸命に果たして研究会を創ろうと一つになっていることを感じました。これは，お互いが取組や役割を認め，任せるという自覚と信頼があってこそだと思います。自覚と信頼をこれからも強めていかなくてはなりません。

私のところへも、「これをしてみた。」とか，「これを取り上げたいのですが，どうですかね。」などといった話が入ってきます。これは，教材開発や研究を楽しんで取り組んでおられる表れではないでしょうか。教師側が楽しんで追究していることを，その通りに，

追体験的に単元構成すれば，子どもも楽しんで探究的な学びを展開するはずです。子どもに価値あるものを提供し，力を付けることが私たちの研究の目的なのですから。

木村先生が「この時点で，教材の解釈や授業の仕組みについて議論できるのは，すばらしいことです。」と話しておられました。これは，先生方が社会科独自の授業のつくり方や教科書・副読本の内容に固執せず，問い・思考を仕組む探究的な授業とそれに見合う魅力ある教材を追求してこられた成果だと思います。つまり，社会科授業のノウハウの習得ではなく，授業力の向上といえるでしょう。ぜひ，楽しいことを見つけて，提案してみてください。

今回の木村先生の講演から，私が考えたことをお話しようと思います。

木村先生は，思考(力)として，「比較」，「想像」，「具体・抽象」の三つを示されました。

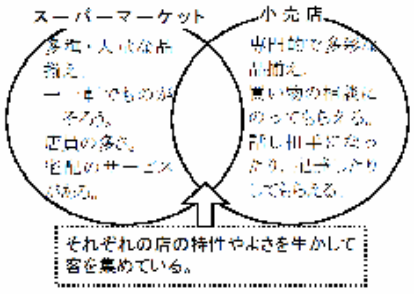
「比較」は，二つ以上のもの比べて，共通点や繰り返されていること(類比)，相違点や食い違うこと(対比)を見出すことです。ここで大切なのは，何について，どこに着目して比べるかという「観点」を明確にしておかないと，比較が拡散してしまうことです。

「想像」は，だれかの立場(視点)から事象を見たり，「もし，～なら。」と仮定したりして，推測したり共感したりすることです。社会科では，よくある思考でしょう。

「具体・抽象」は，事例の仕組みや特色から，一般的な原理やあり方を見出したり，その逆で，一般的な原理を事例に適応させたりすることです。この思考には，前提として，いくつかの事例との比較(類比)や意味付けが必要となります。一つの思考を支えたり，助けたりするいくつかの思考を組み合わせることが必要だと考えられます。

その他に大切な思考として，「構造・関係」，「条件」が考えられます。「構造・関係」とは，事象相互の関係を見出し，構造としてとらえることです。「条件」とは，何かが生じるために必要な事象を見出すことです。

では，これらの力をどう育てるか。それは，授業で，実際にこれらの思考をすることによって，訓練することです。それは，これらの思考をする力こそが思考力だからです。とすると，これらの思考を授業に仕組むことが必要となります。これが「学び合いシート」の活用のねらいです。



〈 資料1:「私たちのくらしと商店」の構造 〉

「思考の仕方」とは，その問いを探究し，ねらい・内容に到達するためには，何をどう考えればいいのかという，まさに，上で述べたと思考活動です。具体的にどのような思考活動を設定するかのよりどころは，ねらいと教材・内容の構造です。

以前も例示しましたが，「私たちのくらしと商店」の小売の個人商店にも客が来るわけを考える学習では，スーパーマーケットなどの大型商店と対比することによって，それらにはないよさがあることに気付く思考を仕組むことになります。それは，〈資料1〉のように，スーパーマーケットと個人商店は，店としては同じでも，違う質を持ったものとして対比の構造とな

るからであり，個人商店がスーパーマーケットに負けないよさを見つけるためには，それらの違いから考える必要があるからです。（今年度の研究推進計画や１７号にも書かせていただいています。ご参考までに。）

このように，問いを設定し，「思考の仕方」として思考を仕組むことによって，子どもは，主体的に考え，意見交流しながら，自分の考えを修正・強化していくという，探究的な学びを促すことができると考えられます。同時に，こういう題材・問いに対しては，このように考えればいいと選択し，実際に思考活動をする力を育てることができると考えられます。思考力を付けるためには，主体的な思考によって，思考を鍛える必要があるということであり，そのためには，思考活動の場面を意図的に，適切に仕組む授業づくりが必要なのです。

前号でも，述べたように，「着目点」が曖昧であったり，ぶれていたり，「考え方」が授業のねらいや内容になっているケースが多い気がします。今回の話を機会に，もう一度見直し，考えて見ていただけると幸いです。

いよいよ，１０月３０日に向け，スタートを切る時期が来ます。２年とはいえ，これまでに積んできた研究と白島らしさを生かしながら，これまで通り，地道に先生方の実践を深め，子どもの育ちへとつないでいきましょう。今年度も，ご支援とご理解ありがとうございました。